

司書のオススメ本

その夏、乳房を切るめぐり逢った死生観

篠原敦子（著） 創栄出版

配架場所：闘病記 請求番号：916||SHI

女性特有のガンと言われる乳がんは10人に1人という時代になった。女性の結婚・出産・育児の道を通っていないからだという人もいる。著者は49歳のときに、右の乳房を全摘。突然の告知、手術や副作用。しかし、病気だけに構ってはいられない。老いた両親の介護や詐欺との闘い、派遣時代に味わったトラウマなど様々な困難が病気とともに襲ってきて、とても泣き叫ぶ暇なんてないのである。著書のなかでたまらく切なかったのが、手術前の温泉において、鏡に向かって裸の胸にシャッターを切るシーンである。

ガンの夫を自宅で看取る

医療ソーシャルワーカーの介護日記から

児島美都子（著） 農山漁村分化協会

配架場所：闘病記 請求番号：494.5||KOJ

夫が末期ガンと診断され、余命6ヶ月という告知。夫婦が望んだのは「普通の暮らし」。本書は夫の病状メモを入れた妻の介護日記である。医療の選択、日常生活のケア、医療関係者とのネットワーク、ソーシャルワーカーという立場から見た、患者や家族を取り巻く環境などが、夫の日記とともに淡々とそして詳細に書かれている。自宅に戻り13日間の闘病の末、穏やか死を迎えたのである。著書の最後にガン患者の在宅介護について、患者とその家族に対する福祉サービスや行政の支援制度の拡大を提言している。

ゴッド・ブレス・ミー エイズとの闘い

福田慶一郎（著） 新風舎

配架場所：闘病記 請求番号：916||FUK

今現在、エイズ=死ということは言われなくなったが、それでもどこか遠い話とってしまう。著書では「エイズかもしれない」という心の葛藤や、恋人の死に直面し、自分の死を強く突きつけられた際の不安定な心情が書かれている。そして、保健所で告知され、いざ通院を始めると、エイズ拠点病院で、エイズ患者への差別ともいえる対応を受ける。病院としての怠慢だと思いつつ、自分の病気に引け目を感じ、ただ黙っているのである。

テーマが重く、著者の精神的苦痛が、痛いほど感じるが、誰にも起こりうることなのである。

ぼくらはみんな生きている

18歳ですべての記憶を失くした青年の手記

坪倉優介（著） 幻冬舎

配架場所：闘病記 請求番号：916||TSU

18歳の雨の日、乗っていたスクーターがトラックと衝突し、意識不明の重体となるが、記憶をすべてなくした状態で、奇跡的に目覚めた青年。身体は時間をかけ、回復していくが、自分のこと、家族のこと、食べること、寝ること、全てが分からないのである。母の記憶として、事故や息子の自立を母親の視点から書かれているが、それが一層、記憶喪失という現実の厳しさを読者に教えてくれる。モトクロスのバイクに乗り、ジャンプをする最後の場面は、爽快感すら覚えてしまう。